見付宿古絵図（江戸時代、年代不詳）

見付宿と阿多古山一里塚

現行政区は、浜松市から数えて二十八番目、面積三番大きいから二十六番目の面積を誇ります。見付宿は中世に作られた伝説『曽我』に「見付は美しい町」と紹介されています。江戸時代後期の資料によれば東西約1km、新町、横町、西新町、横町と四本の通りで成り、宿場中央には高札場や問屋場が置かれました。ほぼ毎日市が開く、東海道宿場の中でも最大級の賑わいを見せていました。

この見付宿の東側の入口に、阿多古山一里塚があります。この塚は旅行者の目安として、また、旅人の休憩場として使われていました。

一里塚は、江戸時代の街道（二六〇年以前）に整備されました。阿多古山一里塚は、江戸から六十二番、京から六十四番目にあります。一里塚は残っている例はあまりなく、ほとんど消滅のなかで、江戸の面影を残す貴重な遺跡として、昭和四十二年に静岡県の指定史跡になっています。